

山口県立美術館ニュース

天花

TENGE

第27号

昭和61年3月1日
発行山口県立美術館



三輪休雪 萩水指

表紙作品解説

三輪休雪

1910(明治43)~

萩水指

陶器・1981(昭和56)・15.3×16.7×18.0(cm)

茶陶に古くから見られる矢筈口形の水指で、悠容迫らざる端正な造形の中に、盤石の如き安定感と人の心を惹きつける迫力を秘めている。

この種の水指は、通例胴部の正面をかすかに圧えてアクセントを付けるものを、作者は逆に両側面を圧えるようにして正面中央部を総体的にわずかに凸出させて面高にしており、これがかえって豪然たる迫力をみまぎらせているといえよう。この手法は、この種のものでは類を見ない珍しいもので、非凡という他はなく、さらに基底部を三か所母指で圧えてアクセントをもたせた手練のほどはさすがで、卓抜な造形力と作行きの新鮮さを謳われる萩の巨匠ならではの感を懐かせられる。

そのたつぷりと掛けられた、やわらかく温かい藁灰の白釉こそは世に謂う「休雪白」で、いまは亡き人間国宝の兄休和翁が、昭和二年三輪窯十代休雪を襲名した年、折しも萩中学校を卒えて兄に師事して家業に従事した作者が、兄のアシスタントとして創出した三輪窯独特の藁灰釉である。

後年作者が、「私ら兄弟は白ぐす

りに魅せられ、これを茶碗に用いることに苦労した。」と述懐しているが、古萩における藁灰の白釉はあまりにも冷たい、そこでもっとあたたかい白釉を創ることを心掛けたという。

それはあたかも春の陽光に映える残雪のやわらかさを想わせ、そのさりげなくつつけられた椎茸のような両側の耳はいかにも枯淡な雰囲気漂わせ、鉄褐色の見島土の化粧(萩焼ではエンゴベイともいう)が、やわらかい藁白釉をはじかせて絶妙のコントラストを見せており、右側の底部に近い白釉はかすかに火をにじませている。

胎土は荒砂まじりの大道土に見島土を混ぜたもので、左の肩部に一か所、指跡とおぼしき茶褐色の土見せがおのずから景色を成し、基底部の小砂まじりの茶褐色の素地が白い釉膚とコントラストを成している。

「白を出すには高度な技術が要る。火度が高くないとクスリは効かない。だが火度を高くすると茶碗(器体)が硬くなる。いかにして高い火度でやわらかい焼物づくりをするかである。」とも洩らす作者である。

この雄渾にして気品を秘めた清冽な白萩の水指に対してみると、私にはいみじくも、「名品とは、素地が非常にうまく出来たものが、窯でうまく焼けたときである。」と話されたかつての休和翁の名言が憶い起されてならない。

四百年に垂んとする萩藩御用窯の伝統に根ざしながら、その伝統を新鮮な造形感覚によって見事に現代に生かしてきている、現在稀有な伝統作家ともいふべき作者の作品としては、この水指はきわめてオーソドックスなものではあるが、やはり見る人の心を打たずには措かない優品である。(当館館長 河野良輔)

三輪休雪 萩茶碗



大黄河文明の流れ 山東省文物展

河南省北部をすぎた黄河は、山東省につきあたり、しばらく河南・山東の省境をすぎ、山東省に入っている。済南の北をとりすぎ、やがて五〇〇キロにもわたって流れつづけた黄河は渤海湾にそそぎこむ。

この黄河の流域には、早くから文明が出現しており、「中華民族のゆりかご」ということばもあり、仰韶文化、龍山文化は古くからよく知られていた。しかし、最近の考古学的果はめざましく、流域各地において、連続性のある文化が確認されつつあり、山東省においても、新しい知見が続々と明らかになっているのは、前号中村氏の「山東省新石器文化の展開」にあるとおりである。

今回の展覧会は、山口県と山東省との友好省県関係をふまえ、山東省における考古学的な成果を背景に、黄河文明の展開を、最新の資料によって描き出すとするものである。展示は一一〇（一八四点）で、画像石室墓模型、拓本複製品などで立体的な構成をめざしている。

テーマが「黄河文明」であるため、展示品の比重は古代に大きくかたむき、紀元前後（約二〇〇〇年前）以前の作品が約八〇パーセント以上を占めている。ほぼ時代順に展覧会は

構成されており、紀元前五〇〇〇年以上も前の北辛文化から始まり、最後は、明代初めの魯王朱檀の墓からの出土品で終わっている。このように長期間にわたる時代を対象とするため、以下の四部分に分けて構成してある。

第一部 黄河と農耕文化

——新石器時代——

第二部 齊・魯の国と青銅器

——商時代から戦国時代——

第三部 画像石と蓬萊の国

——秦・漢帝国——

第四部 中国芸術の開花

——三国時代から明時代——

各部については、図版とともに別に簡単に述べるが、ここでは、注目される出品物を二、三あげておく。

大汶口文化期の灰陶尊（図二）は莒県から出土したものであるが、上部にほられた記号が注目される。今回出品されるもの以外にも数種の記号が確認されており、文字の成立とどのように関連しているのかは大変興味ぶかい。この記号にはじまり、青銅器、仏像などは銘文のあるものを主に選んであるので、商（殷）から周、春秋、戦国、秦、漢、北魏、北齊、隋、唐などの文字の例がそろ

う。今回、記号、銘はすべて山東省博物館に拓本を依頼してあるので、時代による文字の変化を楽しむのも一興かもしれない。

龍山文化を代表するのが黒陶であることはよく知られており、なかでも卵殻黒陶は、素地が卵の殻のようにうすいことからその名があり、精選された胎土、精密なロクロ技術、発達した窯など、新石器時代最後の文化をかざるにふさわしい土器であり、また金属器がすぐちかくにあることをよく感じさせるものである。

本展では黒陶だけでも八点という異例の数を出品しており、卵殻黒陶はそのうち三点である。もちろん卵殻黒陶も注目されるが、さらに興味ぶかいのは、大型の黒陶で、とくに一級文物（国宝、重文級）に指定されている黒陶高台豆は、黒陶の別的一面を印象づけてくれよう。山東省ならではの出品といえる。

会期 昭和61年4月26日(土)

6月15日(日)

休館 月曜日・ただし5/5まで

無休。5/6休館

料金 一般800円、高大生500円

小中生300円 前売・団体

200円引



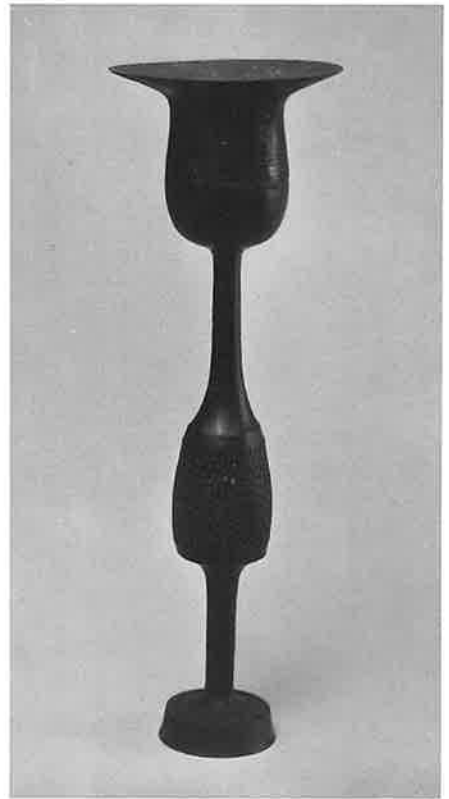
彩陶豆



黄褐陶鼎



紅陶獸形壺



卵殼黑陶高柄杯

第一部 黄河と農耕文化

—新石器時代—

黄河下流の山東省地域の新石器時代は、北辛文化・大汶口文化・龍山文化と展開し、この時期の遺物は土器・石器を主体とする。

北辛文化は、中国最古の新石器文化のひとつで、今から七千年以上も前に始まったとされている。

大汶口文化の発見は、それ以前から知られていた龍山文化との連続性が確かめられ、約二千年の間に、母系社会が父系社会に変化していくことが、墓制によって確認できるなど、数々の注目すべき成果をあげた。

本展では、土器・石器のほかに、男女・子供がいつしよに埋葬され墓の実物大の模型も会場に復元する。この時期の土器は器の形もバラエティに富み、つくりもていねいで、晩期にはロクロも出現しており、より精巧なものがつくられている。また、獣骨工芸品も多彩で、豊かな文化の内容となっている。

龍山文化は新石器時代の最後に位置し、黒くつやのある黒陶がこの文化を象徴している。



銅鉞



金銀象嵌犧尊



金銀象嵌銅鏡



銅方鼎



銅方座簋

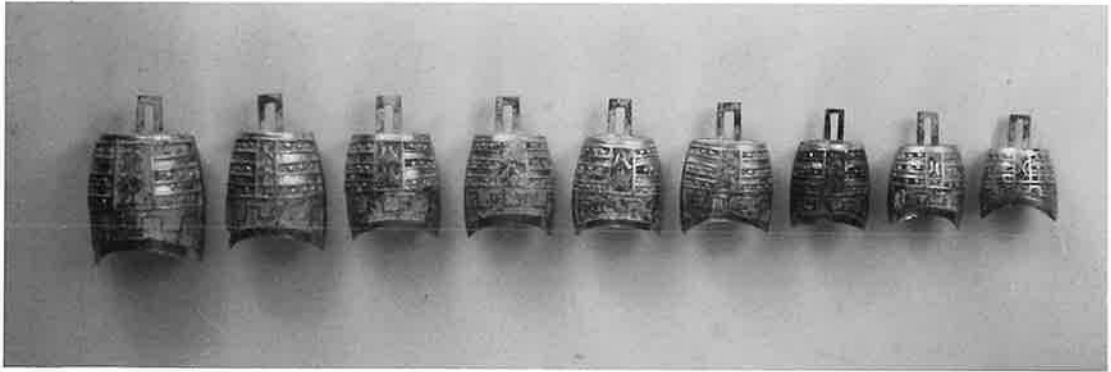
第二部 齊・魯の国と青銅器

— 商時代から戦国時代 —

この時期の中心は青銅器である。商(殷)・周・春秋・戦国とスタイルを変えながら、さまざまな青銅器がつけられつづけているが、今回は、ほぼ各時代の代表的な遺品を見ることが出来る。とくに益都で発見された商代の墓からは、奴隸の首を切ったといわれる銅鉞が二点出土しており、一点は実物、もう一点も複製品が出品される。

山東省地域は、春秋から戦国にかけて、小国分立状態から、齊・魯二国に統合されていく時期にあたる。現在齊・魯両国関係の遺跡も、かなり発掘調査がすすみ、大きな成果をあげており、本展でも、両国遺跡のコーナーをもうけ、実物遺品の他にも地図、写真パネル等でその一端を紹介したい。

齊・魯両国関係の遺品では、金銀象嵌銅犧尊や同じく金銀象嵌銅鏡など、金銀の他にトルコ石も象嵌された華麗なものや直径が三〇センチメートル以上もある玉璧や華麗な玉佩が目をひく。



鍍金銅編鐘



金縷玉衣



緑釉厨俑



負壺陶鳩

第三部 画像石と蓬萊の国

— 秦・漢帝国 —

秦の始皇帝によって中国全土が統一されると、山東省地域も新しい展開をみせる。

秦の遺物としては度量衡統一の詔文をもつ陶量(升)を展示する。

漢時代に特に注目されるのは経済的な繁栄で、製鉄・製塩・紡績の三大産業では、いずれも全国有数の生産量を誇っていた。当時、多くの王侯貴族がこの地に封ぜられ、それぞれが経済力を背景に権勢をふるった。このことをよく示すものに画像石墓がある。本展では、沂南で発掘された画像石墓の模型と二点の画像石の実物、さらに拓本で造りあげた実物大の祠堂を会場に復元する。

さらに、紙の発明以前に細い竹の表面に書きつづった孫子・孫臏の兵法や当時の暦などが発見され、世界的なニュースとなったが、今回、初めてその実物が国外へ出品されることになった。また陶磁器でも、鳩の羽の上に壺を二つ乗せた極めて珍しい俑、漆を塗った陶器などが出品される。



河清三年銘銅彌勒像



石騎馬女俑



青花雲龍文罐



青磁蓮華文四耳尊

第四部 中国芸術の開花

— 三国時代から明時代 —

南北朝以降の展示は、多彩な中国芸術の一端の紹介という色あいが濃い。なかでも、仏教彫刻と陶磁器に重点が置かれている。

仏教彫刻は、南北朝時代から唐代に至る仏像形式の変遷がたどれるよう選択されている。南北朝時代の山東省地域は、北朝の治世下にあり、北魏は仏教を信奉し、優れた仏像をつくった。北魏仏にはじまり、北斉、隋、唐各時代を代表する仏像が出品されている。

山東省は古くから陶磁器生産の盛んなところであるが、今回出品されている作品も、北斉・隋・宋の山東省でつくられたものを中心として、北斉、隋の青磁、唐三彩、黒釉陶など、優作が集められている。

展示会の最後は明代初めの魯國王朱檀しゆたんの墓の遺品である。なかでも、木製の俑が四百点以上出土しており注目されるが、今回はそのうち馬一頭と人物五体が展示される。他に玉製の硯や、魯王の木印などがある。

(山東省文物展開催準備室)

シリーズ
山口美術家伝
(15)
—三輪休雪—

河野 良輔

歴史的環境と生い立ち

休雪さんの三輪窯は萩焼の歴史とともに古く、寛文三(一六六三)年萩藩の御用窯として召し抱えられた御用窯初代の三輪休雪(忠兵衛利定)以来、李朝の陶技を受け継ぐ萩焼の流れの中で、特殊なモメントを持つ御用窯として、江戸時代を通じて繁栄し、現代に及んで十一代である。休雪さんはこの由緒ある三輪窯九代雪堂の三男として、明治四三(一九一〇)年二月四日萩市無田原の現住地に生まれる。

その頃の萩焼は、明治維新の変革後最も衰退していた時期で、旧藩御

用窯として坂窯と並ぶ名門三輪窯も、御多聞に洩れず苦境に喘いだ時期であり、そうした中で幼少期を過ぎた休雪さんには、明治維新の志士高杉晋作に愛されたという剛直な祖父八代雪山の薫陶と、いまもなお敬慕して止まない一五歳も年上の兄休和翁(故十代休雪)の慈愛とがよほど身に沁みているようである。

昭和二年三月、旧藩校の流れを汲む名門萩中学校を卒業すると同時に、この年十代休雪を襲いだ兄休和に師事して家業に従事することとなった。十代休雪に嗣子がなく、十一代を継承すべく運命づけられていたのである。

裏方三〇年

休雪さんの陶芸歴をふりかえって強く感ずることがある。それは、作家としてデビューした昭和三〇年を一つの節目とすると、それまでの約三〇年の長い年月の日々のことである。

古くからやきもの造りの諺に、「土踏み三年、ロクロ一〇年」といって、基礎修練の大切なことを言っているが、休雪さんにはこの基礎修練の完璧さが身についていることを痛感させられてならないのである。

休雪さんの土踏み、ロクロは一〇年どころではない。青春の日々は、

陶房の下働きに明け暮れ、ロクロ成形に至るまでの雑用に没入させられたという。

昭和十一年、貞枝夫人を迎えて一家を成してからもなお、土ごしらえ、釉薬づくり、土踏みと、黙々と兄を扶けて裏方の生活に甘んじて来たが、三〇歳も過ぎた昭和一六年の晩秋から、漸くロクロの本格的修業に入るのである。

ロクロ成形の修業に入った昭和一六年の一二月、休雪さんの作陶人生において絶対見落すことの出来ない機縁に遭遇する。

それは僅か二〇日間余りの短期間のことではあったが、当時三重県津市の千歳山に窯を築いた川喜田半泥子翁のもとでの修業であった。一窯焼いたその技術の修得よりも、半泥子翁の人間の偉大さに触れた得難い体験が何ものにも代えられないと、いまでも休雪さんは述懐するのである。

この半泥子翁のもとで、一二月八日の太平洋戦争の勃発を見た休雪さんは、戦局もいよいよ末期に近づいた昭和一九年の夏、三四歳で召集される。瀬戸内海の大津島高射砲隊の測定兵としてであった。

敗戦後は物資不足のため、これまで不況のどん底にあった萩の窯元に

も、ようやく製品の注文が増加する中で、休雪さんのロクロ成形にも一層の拍車がかげられた。

萩焼はもともと茶陶であるから、伝来の写し物や型物等、一通りは習得するのが通例である。しかし、休雪さんは穏和ではあるが極めて個性の強い人である。それ故一率に量産する湯呑とか、煎茶器のような、いわゆる数ものをこなすことは性に合わなかったようで、もっぱら茶碗の成形に精進した。昭和二〇年代は殆んど茶碗だけに集中し、造っては割り、割っては造り、割った茶碗の素地は無慮何万に及んだという。稀に見るこのような裏方の生活と、長い基礎練磨の蓄積が、後年の休雪芸術を開化せしめたことを決して見逃すわけにはいかない。

作品をして語らしめる休雪陶

休雪さんが萩焼作家として名乗りを挙げるのは昭和三〇年四五歳の時である。その技術からすればまことに遅きに失している。しかも雅号を「休」としての首途で、それは兄十代休雪の半人前という卑下した遜称で、そこにも休雪さんの奥床しい根をかい間見ることが出来るというものである。



その年の九月、全日本産業工芸展に入選した萩の新人三輪休の作品は、その首途にふさわしく、選抜されてアメリカ各地を巡回する。

ついで三二年には日本伝統工芸展に初入選し、また日本橋三越に三輪休雪・休茶陶展を初めて開催する。さらにこの父子展（実は兄弟展）は三四年以降名古屋松坂屋においても隔年開催する。

その後は朝日現代日本陶芸展、国立近代美術館現代国際陶芸展、スペイン国立民芸館、第一回日本伝統工芸秀作展等々に招待出品されているが、三輪休として登場した休雪さんの作品が、従来の萩焼から抜け出したその新鮮な作風によって、これまでの萩焼のイメージを覆したことは、

戦後の萩焼技術史の上で画期的なことといふべきであろう。

昭和四二年五月、古稀を迎えて隠居し、休和を号した兄十代休雪の跡を承けた休は、五七歳にして半人前から一人前の十一代休雪となったのである。十一代襲名の首途もまた奇しくもアメリカ国際芸術見本市への出品であった。

そして四三年には中国文化賞を受け、この頃から休雪個展を展開するが、毎日・日本陶芸展、中日・国際陶芸展、銀座和光・陶芸秀作展等にも招待出品されており、四五年には山口県選奨を受け、四七年には日本工芸会理事に推挙され、またこの年山口県指定無形文化財保持者に認定せられている。

この四〇年代の作陶は、休雪紅とも称すべき「紅萩」の再現と、和風茶碗の探究練磨に傾注されたと言えようが、茶碗における休雪さん独特の割高台は、既に休雪碗とも称すべき作域を確立しているのである。

昭和五十一年の秋には紫綬褒章の栄誉を受けるが、この頃から休雪碗にはさらに新たな変化を読み取ることが出来る。

それは、特に「荒びび手」と称している枇杷釉の茶碗の化粧掛けに工

夫を凝らした新しい展開であり、また四〇年代から取りこんで来た、「休雪紅」とも称すべき独特の化粧掛けの手法による紅萩の完成である。そしてさらに豪放な「筆洗切」の鬼萩茶碗へと、年を追ってその鋭い造形の冴えには目を瞠らせるものがあり、昭和五七年には勲四等瑞宝章を受けている。

昭和五八年四月七三歳で、あたかも亡兄休和の跡を襲ぐが如くに、重要無形文化財萩焼保持者に認定せられ、わが国伝統工芸史上稀に見る兄弟人間国宝として世の注目を浴びる。萩の伝統技法と先祖伝来の和風茶碗の形を継承しながらも、稀に見る個性的な造形感覚によって、因習的な茶陶の世界に新風を吹き込んだ理由によるものであった。

伝統を現代に生かす一、伝統工芸にたずさわる作家が異口同音に発するこの作陶理念は、言うは易くして至難なわざである。

休雪さんが若くして、「伝統の茶席と、現代の茶の間の生活とを調和させる萩焼の創造」を作陶理念として来た精進が結実したもので、休雪さんこそ、伝統を現代に生かすことの出来るたぐい稀な作家といふべきであろう。

そして休雪さんは若い時から決して言挙げしない作家である。「作品をして語らしめよ。」「作品は凡てを物語るものであり、作品の前には一切の虚勢は無力であるというのが休雪さんの信条であり、「自分の生命のこもった、借り物でない作品を作り度い。その気持ちだけはいつも持ち続けて来たし、これからも持ち続けて行き度い。」と、認定に際して言葉少なにつぶやいた休雪さんである。

情緒の愛玩物たる勿れ

いまや齡喜寿に垂んとして休雪さんはいよいよ若く、その作品はいよいよ艶やかでいよいよ鋭い。しかもすさまじいばかりの迫力を秘めた荒砂まじりの鬼萩茶碗は、見る人を圧倒せんばかりである。

そして、ものかずの極めて少ない休雪さんではあるが、萩焼の将来について、

「明日への伝統を培うためには、単に情緒の愛玩物にとどまるべきではない。実生活に密着した萩焼でなければ生き永らえることは出来ない。明日への意欲をかき立てる、迫力のある作品でなければならぬ。」と、きっぱりと断言する人間国宝である。（当館館長）

高島北海と アール・ヌーヴ

安井雄一郎

前稿で「北海の西洋との出会いは生野鉦山での洋学の勉強にはじまる」と書いたが、その後いくつかの事情を検討した結果、かれの西洋体験、すくなくともその前提というべきものは生野行より一年ほどまえに成立していることが判った。

もっとも、そのことを窺わせる材料がなかった訳ではない。たとえば、北海が生野時代に書いた一冊の手帳がある。これが今回紹介する予定だった新出資料だが、北海が生野にきた年をしめす1872の西暦年号を付した「Cahier Communication par terre/Ikouno/1872」のタイトルを

もつ新書判のこの手帳には、タイトルそのものもそうだがペンでかなり達筆のフランス語が記されている。

また生野では北海が着任した翌年の明治六年から同九年にかけて「土質家」レオン・シスリーの指導のもとにおそらく日本初のヨーロッパ式馬車道を生野―節磨津間に敷設している。この事業に北海がフランス語通弁（通訳）として関わっていたことが、事業完了を記してあまれた朝倉盛明の馬車道修築碑文によって判明する。こうしたことから、北海のフランス語への親交は生野にくるまでにある程度すすんでいたのではないかとの想像はできた。が、しかしそれがいつ頃から、またどのような場所で

だったか明らかにしえなかった。その間の消息を示す資料がみつかった。結論からいえば、北海がはじめて

フランス語に接したのは、大阪陸軍所におけるフランス式兵役修業においてであり、その時期は生野にくる直前にあたる明治三年一月ごろから翌四年にかけてである。北海をフランスにむすびつけた最初のきっかけが、洋学の中でも自然科学に先行して兵学にあつたことは注意すべきであろう。以下こうした結論の拠りどころとなつた資料を、紹介をかね検討することで北海の前生野時代の一端を整理しておきたい。

この資料は、大正二年の書画骨董雑誌にのつた「余の山嶽研究」である。必要な箇所だけ引用する。

「…その内維新となつて、明治二年大村益次郎がフランス式の兵制に則つて初めて徴兵の制を試み、先づ自藩の長州から兵を募ることになつたので、私もその応募者の一員として大阪に登つた。これが私が故郷を離れた最初の時で…。徴兵として一年間を大阪に送る内、大に外国語の必要を認めて之が研究を思い立った。

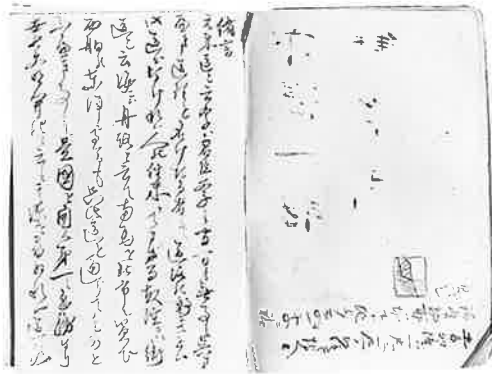
…その時幸いに、生野の鉦山が政府の手で開拓されることとなり、フランス人の技師十三人ばかり来ていた

ので、これに就て語学を研究している内に、彼らから変則的ながら地質学を学んだ。…」

発表の年から判るように、これは当時から四十年をへた北海六十四歳の文章である。したがって年号や事蹟、また動機の意味づけ等についてはいくぶん距離をもつてみていく必要はあるが、少くともこの記述によつて、北海が生野時代に先行して、徴兵のため一年ほど大阪にいたらしいことは判る。この徴兵云々の記述をどう理解すべきだろうか。

末松謙澄編「防長回天史」に拠つて当時の記録をおつていくと、明治二年一〇月に山口藩が二千人の親兵献納を朝廷に申し出たとの記述がみえ、さらにこの件に関するその後の展開をみていくと、おそらく時期的にも北海上阪の事蹟はこの一件に関連しているように考えられる。以下、簡単にその経緯をみたい。

明治元年一月戊辰戦争に従軍した長州藩兵がつきつきに北地から凱旋、帰藩すると、藩ではぼう大にふくれあがつたこれら諸兵の維持に苦慮し、やがて財政上の理由から兵制改革のうえ藩軍勢力を整理再編する必要にせまられた。そこで考え出されたのが親兵（朝廷直轄兵）献納の案



で、これは伊藤博文や大村益次郎の直門山田顕義らの発案だったという。しかし朝廷は明治二年一〇月に出されたこの請願にたいし、とりあえず東京守備隊として千五百人を採用すると回答したものの、同年末の朝命で兵制取調中との理由から、その兵も当分藩内に差し置くよう命じた。つまり実施されていない。

つぎにこの一件に関して朝廷から指示があったのは、翌明治三年八月になってだが、このときの朝命にははじめの藩の意図からすると大きな変更がみられる。第一に兵数が先の千五百人からその中の「一大隊」に縮小している。第二に差し出し先は

その後の詰めで東京ではなく大阪陸軍所と決まった。加えて、その「一大隊」には親兵としての性格は与えられていない。「仏蘭西式操兵練習」のために大阪に出向を命じられているだけである。この大幅な変更の背景は不明だが、ともかく藩はこれに対応し、大阪長州藩邸から大阪兵部省出張所あてに兵受け入れの時期や携行すべき武器等の詰めをさせたのち、上記の「一大隊」を大阪にむけ派遣した。その時期は、藩が大阪兵部省の指示にしたがったとすれば明治三年一〇月下旬である。

では北海はこの一件にどのように関わっていたのだろうか。かれは前掲

文中に、大阪に出たことが郷里を離れた最初の時と書いている。したがって北地凱旋組ではない。この一件はもともと、一つはこの北地凱旋組の兵員処理として発案されたものである。だとすれば、北海はこの一件にとつて途中からその対象者になつたと考えるほかはない。ここで注目されるのはつぎの記述である。

〔明治三年八月〕二十五日元常備軍二仏蘭西式操兵練習ノ為メ大阪へ出向ヲ命ジタレドモ人員不足ナルヲ以テ、士族卒族及ビ陪臣中ヨリ十七歳以上二十五歳以下ノ希望者ヲ採用スル旨ヲ布告ス。

「一大隊」の兵差し出しの意向が明治三年八月に藩に伝えられたとき、その対象である「元常備軍」は人員不足だった。そのため藩ではこれを補充するためあらたに志願者を募つたというのである。前年の十一月、つまり親兵献納を朝廷に申し出た翌月に、藩が断行した兵制改革とそれをきっかけにおこった脱退兵の暴動などで、当時、兵の秩序に混乱が生じていたのだろう。それはともかく、私は北海がこの一件に関わりをもつたのはこの布告によってではなかったかと考える。前掲文中に、「私もその応募者の一員として」と書いて

いるのはこのことをさすものだろう。また「明治二年大村益次郎が……」

以下徴兵云々の記述も、次のような事情を考えれば、この一件とイコールで結ばれる。つまり、ここにいる徴兵制は、構想に着手した大村益次郎からこれを制度化した山県有朋にいたるまで、その成立（明治六年）にきわめて複雑な曲折をへているが、その過程のはじめに試みられた一つが親兵の制だった。もともと大規模だったのは、新政府がこれによって得られた兵力で廢藩置縣を断行したという明治四年二月の薩長土三藩による親兵献納である。「朝廷、三藩ノ兵ヲ徴シテ親兵ト為シ、兵部省ニ隸セシム」これにみると、それより二年を先行する明治二年一〇月の山口藩による親兵献納は、結果的にはその趣旨どおりには実現しなかったもののその先駆をなす試みだったことが判る。北海の、先ず自藩の長州から云々の記述はこのことをさしたものと考えられる。つまり、大正二年から過去をふりかえった北海には、徴兵制とその前過程の親兵制とは同一のものとして把握されているのである。

以上をまとめると、北海は明治三年八月に布告された志願兵募集に応

じ軍人を志望して同年一〇月下旬「一大隊」の一人となって上阪。「一年」ほど大阪陸軍所でフランス式兵役修業に就いたのである。これが北海離郷のはじめであり、同時にフランス語との最初の出会いだっ

北海の軍人志望はどの程度のものであったのだろうか。あくまで想像にすぎないが、諸々の事情を考えあわせると、北海の軍人志望はそれほど強かったとは思われない。しかし、これまでみたように、かれが郷里を出るきっかけとして軍人を選んだことは確かである。明治六年に工部省鉱山寮第一回技術見習生に採用された旧南部藩士阿部知清は、北海とほぼ同じ世代だが、その募集に応じた事情を「この時に当って鉱山寮において大に技術見習生を募集せんとすの風説を聞く。余思えらく区々の家塾に普通の学科を研究するもあに大成あらんや。むしろ専門の学科を实地に修行せんにはと……」と書いている。結果としてはともにお雇い外国人に学びわが国技術官僚の第一世代となるこの二人だが、「大成」を期しての経歴のスタートのきり方には著しい対照がみられる。

北海の人となりは、やはり長州と

いう精神風土をぬきにしては語りえない。これは北海の画事や画論を考へる場合にも不可欠な視点であるように思われる。(当館研究員)

- (1) 河村幸次郎氏によって下関市立美術館に寄贈された高島北海資料中であつたもので、内容の大半は、生野―飾磨津間の馬車道築造に関する講義録風なもので占められている。別稿で紹介する予定である。
- (2) 碑文の全体は、佐々木正勇氏「明治前期に活躍したフランス人鉱業家たち」(前稿註(4)) P.11以下に掲載。
- (3) 書画骨董雜誌第五号 大正二年二月号 P.21-24。引用文は現代表記に改めている。
- (4) たとえば「その時幸いに、生野の鉱山が云々」の記述は、北海の気憶違いによるものか。実際には、政府が生野の開拓に着手したのは、時期的にはずっと以前で明治元年の鉱山官営化までさかのぼる。北海の生野行前後から二年ほどは、むしろもっとも多くのお雇い外国人が居留した時期にあつており、まさに開拓第二期つまり発展期ともいうべきころだつた(前掲註(2)佐々木氏 P.7)。
- (5) 末松謙澄編「防長回天史」(大正一〇年刊)の覆刻版(みなと新聞社一九六七)を参照した。以下、各註の典拠は註(6)、(7)―P.229・262/(8)、(9)、(10)―P.262/(11)―P.230/(12) P.231-233・236-248/(13) P.251・258・271

(14) 北海の軍人志望がどの程度の熱意に支えられていたのかははっきりしないが、本

文中の引用文にみえる、大阪で兵役修業に就いて大いに外国語修得の不可欠なことを覚つたという一文は、この問にたいして示唆的である。すでに他の引用文等にもみえるように、兵制についての新政府の方針は、大村益次郎の強い影響力のもとで早くからフランス式採用の意図をあきらかにしていた。その後、明治三年一〇月二日には、新政府は久しく懸案だつた兵式改革を公にし、海軍は英、陸軍は仏式に範をとることを諸藩に伝えている。これら一連の兵制制度化を主導した兵部省要人には、維新らしい大村をはじめ長州出身者が多数を占め、したがつてその間の新政府の動向はいちはやく山口藩に反映したし、その逆流も少くなかつた。また藩も本藩、支藩を問わず早くから士官養成の人員を仏式兵学の修業のためさかんに中央におくりだしている。もし北海がかなり早くから軍人をこころざしその機会を待っていたとすれば、環境的にもかれはこうした背景に通じていたと考えられる。だとすれば兵学修業の要件に外国語がともなうことは上阪まえに熟知すべきものだつたと言えなくはない。しかし先の文はその逆の事情を伝えている。これに加え、かれが布告によって志願したらしいこと、それに大阪での修業を一年できりあげていることなどを考えあわせると、北海の軍人志望がきわめて強かつたという結論はひきだしにくいようである。

(15) 葉賀七三男氏「阿部知清自伝について」(前稿註(8)) P.26

美術館から

常設展示案内

〔第一常設展示室〕

● 絵画展示室

香月泰男のシベリア・シリーズ

($\frac{1}{4}$ / $\frac{13}{13}$)

小林和作のコレクション($\frac{1}{4}$ / $\frac{13}{13}$)

● 資料展示室

宮崎進と山本文彦のデッサンと版画($\frac{1}{4}$ / $\frac{13}{13}$)

● 郷土工芸室

古萩と現代($\frac{1}{4}$ / $\frac{13}{13}$)

〔第二常設展示室〕

山口県の日本画・洋画($\frac{1}{4}$ / $\frac{13}{13}$)

※常設展示室は $\frac{4}{14}$ 、 $\frac{4}{26}$ 山東省文物展の展示のため休室いたします。

山口県立美術館 ニュース

「天花」

第二七号

昭和六一年三月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753 山口市亀山町三二一

☎(三三)二五二七七七八

印刷 瞬報社写真印刷株式会社